評論 展望

# 文明の転換点における人類学と博物館

## ―民博の開館40周年にあたって考える

文 吉田憲司

国立民族学博物館（民博）は、今年で開館40周年を迎える。大きな節目の年に、民博の第6代館長に就任することになり、日々、その重責を痛感している。

この場でいまさらいうまでもなく、民博は、世界最大級の博物館と、大学院博士後期課程の教育機能を備えた、文化人類学・民族学とその関連分野の研究所である。これだけの規模の博物館、そして大学院教育機能をもった文化人類学の研究所は、世界のどこにもみあたらない。世界で唯一の存在といってよい。

改めてみまわしてみると、民博には、それ以外にも、いくつもの「世界一」「日本一」の性格が備わっている。

まず、民博が過去40年にわたって収集してきた標本資料は、現在、345,000点を数えるが、これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌コレクションとして世界最大の規模のものである。また、民族学に特化した博物館としてみても、民博は世界最大の民族学博物館となっている。

「イメージの力―国立民族学博物館コレクションにさぐる」 民博での展示風景（2014年10月、筆者撮影）。

さらに、民博は、世界全体をカバーするコレクション、展示、研究の陣容をもつ機関――欧米でいえば、ロンドンの大英博物館やニューヨークのメトロポリタン美術館などがそれに当たる――としては、アジアで唯一の存在である。このことに伴って、民博は、アジアで唯一、したがって日本の国内では唯一、世界全体、地球全体をカバーする研究者の陣容と研究の組織をもつ機関だということになる。

初代館長の梅棹忠夫は、民博創設の段階から「世界第一級の博物館」をめざすと宣言したが、すでに民博は、梅棹のめざした「世界第一級の博物館」としての実を備えるようになっているといってよいかもしれない。

ただ、このようにして、いわ

ば蓄積の面では、たしかに世界一の機関になってきたが、発信の面で世界一の存在感を示してきたかというと、残念ながら、そうとはいいがたい。まだまだ、日本国内においても、民博の存在が広く認知されているとはいえない。また、言語の壁もある。私たち民博の研究者がすべての論文や著書を欧文や現地語で発表しているわけではない。とくに、世界を対象に研究・収集をしているにもかかわらず、標本資料のデータベースがこれまで日本語だけで公開されてきたことは、大きな問題だといわなければならない。後にみるように、すでにその状況の改善には着手したが、世界に冠たる蓄積を、国内と世界に向けて積極的に発信することが、今の民博には何よりもまず求められている。

**文明の転換点と知の変貌**

考えてみると、人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思われる。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなざし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯が至る所で起こるようになっている。そのなかで、ややもすれば、排他的で偏狭なナショナリズムが頭をもたげてくるような動きもみうけられる。それだけに、人びとが異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界を築くことが、これまでになく求められている。今ほど、他者への共感に基づき、自己と他者の文化についての理解を深めるという、文化人類学の知が求められている時代はないように思われる。

じつは、このような双方向の接触・交錯の動きが認められるのは、集団間の政治の分野のみではない。学問の分野でも、これまで客観性の追求の名のもとに進められてきた知の営みが、いずれもその時々の歴史や社会制度に制約されたものでしかないことが改めて確認され、学術的な知というものも、さまざまな人びとの間の相互作用によって絶えず構築され続けていることが自覚されてきた。1980年代以降のいわゆる「本質主義」から「構築主義」への転換、「構造主義」から「ポスト構造主義」への展開は、知的生産者と社会の間の相互作用、知識の生産の協働性が認識されてきた過程といいかえてもよい。

振り返ってみれば、民族学博物館、およびそのコレクションを用いた「物質文化」の研究は、20世紀の初頭以降、ひさしく人類学（民族学）の分野でも周縁的な位置におかれてきた。モノを直接の対象とする「物質文化」の研究は表面的あるいは非論理的とみなされ、人類学が「異文化」についての客観的な知を追求する一方で、民族学博物館の展示は、そうした知見とはおよそかけ離れた「異文化」についての旧来の図式を再生産する場として敬遠されることもしばしばであった。

しかし、1980年代以降、人文科学のあらゆる分野での先にみたような見直しの動きのなかで、長期にわたる現地でのフィールドワークによる直接観察を前提に、ひたすら人間社会の客観的な知を求めていたはずの人類学が、じつのところ対象社会をそれ自体で完結したまとまりとして描き、個々の社会の動きに目を閉ざしてきたことが気づかれるにおよんで、人類学の知も結局のところは客観的な知ではありえないことが自覚されるようになった。一方、博物館の世界では、これまで収集や展示の対象になってきた世界の諸民族の側から、従来の博物館の側からの一方的な文化の展示に対する異議申し立てが激しくなっていく。特権的な地位にある研究者が、研究対象となる人びとの文化や歴史を、それに関わる人びとの発言や意見を十分に汲み取らず、「客観的真実」の名のもとに一方的に第三者に提示するという営みは、すでに不可能になったといわざるをえない。

研究者の特権性の喪失、超越性の否定は、しかし、研究者の発言の可能性を封じるものではない。それは、われわれが、もはや、社会や文化を、それを語る行為と無関係に存在するものとは考えられなくなった、ということにほかならない。「創造された伝統」の数々が明らかにされてすでに久しいが、近年の文化研究は、「伝統」に限らず、文化そのものが、所与のものではなく、絶えざる構築のプロセスそのものであることを明らかにしてきた。たとえば、人文諸科学におけるいわゆる「言語論的転回」(Linguistic turn）を踏まえて『カルチュラル・ターン』（*Cultural Turn*）を著したデイヴィッド・チェイニーは、文化は何らかの本質をあら

かじめ備えたものでなく、意味やアイデンティティを巡る戦場であり、絶えず構築されるものであるという（Chaney 1994）。文化や歴史が、さまざまな語りや実践の力学のもとでつねに構築されている存在であるとすれば、研究者もまた、そうしたプロセスの外側で超越的な足場を保持することはもはやできない。とすれば、文化の研究者に可能なのは、自らがそのような文化の構築のただなかにいることを自覚しつつ、さまざまな力学の相互作用のなかで文化が構築されるプロセスを解きほぐしていく作業であり、それを通じて新たな文化の構築にコミットしていくことであろう。実際、人間文化研究の諸領域で行なわれている作業は、まさにそうした作業にほかならない。

### モノへの回帰

そして、今、正確にいうなら1980年代末から、人類学、さらには広く人文社会科学の分野で、ひさしく等閑視されてきたモノに関わる研究への、大きな転回が進みつつある。

人類学が、モノの研究から距離を取っていた時期、すなわち構造機能主義から構造主義へと展開していく20世紀の大半を占める時期にも、モノへの言及がなかったわけではない。しかし、そこでは、モノは社会的機能や象徴的意味を担う媒体としてとらえられ、人類学者の関心は、それらの機能や意味の解明におかれていた。いいかえれば、主体となる人間の側からの言語を介した意味付与や価値付与のあり方に関心が集中していたといってよい。

1980年代末以降にみられる人類学におけるモノの研究の特徴は、むしろ、モノを起点に、モノによる人間への働きかけ、あるいはモノと人間の相互作用によって生み出されていく世界のありようを解きほぐそうとしている点にある。アパドュライによる『モノの社会生活』（Appadurai 1986）、マリリン・ストラザーンによるモノを通じて作り出されるイメージの研究（Strathern 1991）、それにアルフレッド・ジェルによる、アートのエージェンシーについての研究（Gell 1998）などがそれである。マテリアリティの研究と総称されるそれらの動きは、モノ／アートに関する研究を人間と社会との関係性のなかに位置づけなおし、人間の経験のあり方としてとらえなおそうという試みであるといってよい。

『モノをとおして考える――民族誌的に器物を理論化する』（Henare, Holbraad and Wastell 2007）と題するヘナレやホルブラードらによる論集は、こうした動きを、1980年代にすでに「静かな変革」として始まった、人類学のエピステモロジー（認識論）からオントロジー（存在論）への転換、すなわち「存在論的転回」（Ontological Turn）の一部として整理してみせた。この論集の編者らは、まずモノがあって、そのモノに、文化を異にするわれわれと彼らがそれぞれ別の意味を付与しているのではないとし、そのモノを通じて彼らがその世界をどのように構成しているのか、すなわち彼らにとっての世界のありよう＝「存在論」を明らかにするのが人類学の務めであるとした。つまり、人類学の仕事は、異なる文化に属する者が「この世界」をどのように考えているかを、人類学者の属する文化のイディオムで明らかにすることではなく、彼らがモノを通じて世界をとらえているようにわれわれがとらえるには、どのように考えればよいかを明らかにすることだという。

ホルブラードらによる論集が、ブルーノ・ラトゥールのアクター・ネットワーク論に多くを負っていることは間違いない。それは、人、モノといった要素を、諸関係を構成する「対称的な」アクターととらえ、それらのアクターが紡ぎだすネットワークの動態を把握しようとする議論である。一方で、この論集の編者らは、「存在論的転回」をもっとも鮮明に体現する論者として、ブラジル出身の人類学者、エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロの名を挙げる（Latour 1993）。

周知のとおり、ヴィヴェイロス・デ・カストロは、「アマゾンその他の地域における宇宙論的パースペクティヴィズム」と題する論稿のなかで、アマゾニアにおけるシャーマニズムやアニミズムを論じ、それらの現象を単一の自然に対する多様な文化的解釈なのではなく、単一の精神に基づく多様な自然の存在の経験だとして、それを「パースペクティヴィズム」あるいは「多自然主義」と名づけた（Viveiros de Castro 1998）。いわばそれは、異文化のいだく存在論を人類学者の論

理で解釈するのでなく、その文化の担い手自身の経験のありようとして受け入れようという宣言でもあった。

モノを、人間が意味を与える対象としてではなく、人間に作用を及ぼす存在ととらえるとき、人とモノ、主観と客観、文化と自然といった二項対立的な区分は無化し、マテリアリティの研究は世界の経験の様態の研究へと転化する。ラトゥール、ヴィヴェイロス・デ・カストロらに先導される「存在論的転回」と呼ばれるようになった人類学の大きな動きは、確かにマテリアリティの人類学的考察の展開と軌を一にするものと位置づけられよう。

他方、人間が生み出したモノのなかでも、とくにアートとみなされるものを対象にしてきた美術史学の分野でも、1990年代以降、ハンス・ベルティンクの『イメージ人類学』（Belting 2001）を筆頭に、ディディ＝ユベルマンの『イメージの前で――美術史の目的への問い』（Didi-Huberman 1990）、あるいは、デイヴィッド・フリードバーグや、ヴィクトル・I・ストイキツァの仕事など、美術史学に人類学的な視座の導入をはかろうという、「イメージ人類学」と呼ばれる一連の研究が展開してきている。

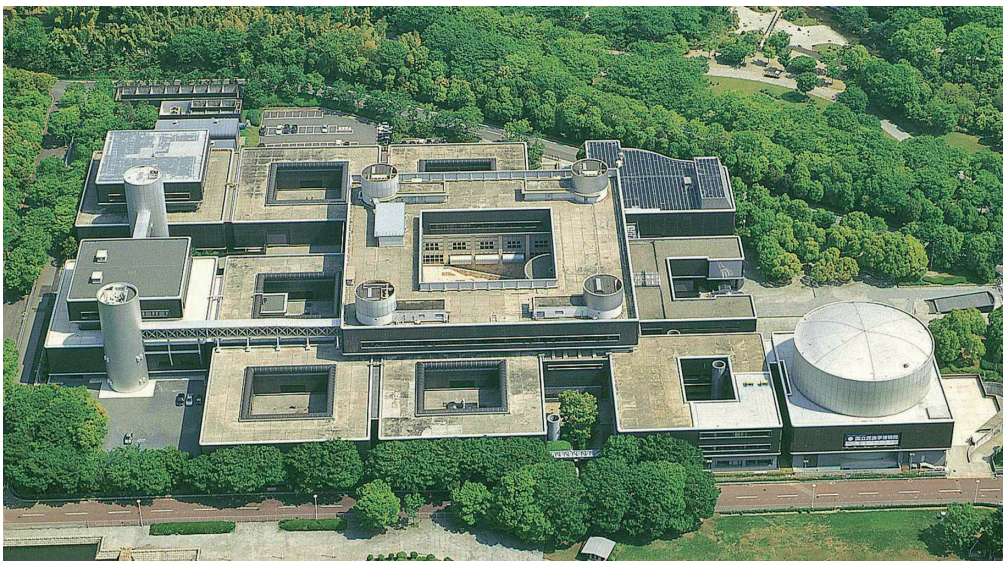
芸術学・美術史学の分野では、「芸術」「美術」、つまり「アート」という語彙とそれにまつわる諸観念が、西洋とその思想的影響下で成立したということもあって、今日に至るまで、主たる研究対象を、西洋を中心とし、せいぜいのところ東洋を含む世界の事象に限定する傾向が続いてきた。芸術学が、文字どおり人類の生み出した「芸術」を対象とした学となること、あるいは美術史学が西洋美術史・東洋美術史に限定されることのない世界美術史の学となることは、いまだ十全には実現されていない。「イメージ人類学」と呼ばれる動きは、研究の対象をアートからイメージというカテゴリーへと拡大し、その視野を一気に拡大しようという試みにほかならない。

そもそも、人間のあらゆる知の営みが社会との関係性のなかでとらえなおされた、1960年代から80年代に至る時期のパラダイム・シフトを経験した今、アートはもはや普遍的な美的規範に裏打ちされた自律的な領域とはみなされなくなった。アートもまた、それぞれの社会や文化に組み込まれた存在であることが自明視されるようになってきている。一方、科学も、時代を超越した普遍的真理を開示するものではなく、それぞれの時代・社会の制約のもとで、特定の立場から切り取った、特定の見方・理解を開示するものとしてとらえなおされてきている。いまや、科学と芸術、人類学と美術史学、博物館と美術館、客観と主観、西洋と非西洋、さらには自然と文化といった、20世紀を通じて、両者を分け隔ててきた壁が無効化してきているといっても過言ではない。人類学も美術史学も、あるいは、ミュージアム・スタディーズも、問題系を共有するなかで、今、分野の別を超えた新たな知の沃野に足を踏み出したということができるであろう。

「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」 国立新美術館での展示風景（2014年6月、筆者撮影）。

### これからの民博

以上に紹介したような1980年代以降の世界の動きや、人類学、そして博物館の動きを受けて、民博では、2008年度から本館の常設展示の全面改修を実施してきた。その作業は、先ごろ、2017年3月に一応の完了をみたが、この4月からは、研究部の体制も全面的に改め、時代の要請に応じた新たな組織で研究活動を推進することにした。新たな体制では、公募制の共同研究の枠は堅持する一方で、各研究部自体が主体的に共同研究・特別研究をけん引し、その成果を国際発信していくというかたちを内外に鮮明にしたいと考えている。新しい研究部組織は、4研究部1センターから構成されるが、いずれも、国内外の大学や研究機関、さ



上空から見た現在の民博。1977年の開館時と比べると、その後、3棟の展示棟（画面左端の2棟とその右隣り最上部の棟）と特別展示館（画面右端）、講堂（画面右上角の建物）が加わったことになる。

らには研究や資料収集の直接の対象となった社会の人びと、すなわちソース・コミュニティの人びとと連携し、国際的な協働のもとで研究活動を展開していくことになる。

全面改修を終えた本館展示も、次の新たな段階に進む。柱となるのは、次世代みんぱく電子ガイド（携帯型展示解説装置）とそれと連携した新しいビデオテーク（映像番組の視聴装置）のシステムの開発・導入である。具体的には、スマートフォンを利用して、展示場での展示解説機能と、特定のテーマに沿った展示誘導機能、さらには視覚障がいをおもちの方の誘導機能を備えた次世代電子ガイドを開発すること、そして、展示場で検索した展示物の解説情報が電子ガイドに記録され、それに関連した番組や情報をビデオテーク・ブースで取り出せるだけでなく、自宅のPCからも引き出せるというシステムの開発を考えている。また、こうした展示場での情報提供とは別に、バーチャル・ミュージアム化した展示場の情報コンテンツを民博の研究者が蓄積してきた研究情報と結びつけて、インターネットを通じて国際配信するとともに、ネット配信に制限のあるデータについては新たに開発する可搬型ビデオテークに実装し、展示場から離れた大学等で研究や教育に活用できるようにしたいと考えている。この事業は、一言でいえば、モノの展示と情報メディアを高次元で統合したシステムを実現しようとするものである。それは、初代館長の梅棹忠夫がつとに唱えていた「博情報館」というものを最新のかたちで実現するものといってよい。

## フォーラムとしての博物館

これら新たな活動を展開していくうえで、私たちの共通の認識となっているのが、「フォーラムとしての博物館」の実現である。すでに1970年代に、美術史家のダンカン・キャメロンが、ミュージアムにはテンプルとフォーラムという2つの選択肢があると指摘した（Cameron 1974）。ここでいう、テンプルとは、すでに価値の定まった「至宝」を人びとが拝みに来る神殿のような場所、一方、フォーラムとしてのミュージアムとは、人びとがそこに集まり、未知なるものに出会い、そこから議論が始まっていく場所という意味である。私が、そのキャメロンの議論を最初に紹介したのは、1994年の民博創設20周年記念シンポジウム「21世紀の民族学と博物館」の場であった。その折り、私は「これからのミュージアムには、ますますフォーラムとしての役割が求められるだろう」と述べたが、以来23年、このフォーラムとしての博物館というコンセプトは、その後民博のなかで共有され、本館展示の改修にあたって2007年にまとめた展示基本構想にも、「フォーラムとしての博物館をめざす」という方針が明記された。9年をかけて実現した本館展示の全面更新と、その延長線上に予定されている展示情報の高度化の作業は、この「フォーラムとしての博物館」の実現の過程だといえよう。また、民博だけでなく、世界の博物館は、その後、間違いなくフォーラムとしての性格を色濃く帯びるようになってきている。

民博では、現在、「フォーラム型情報ミュージアム」というプロジェクトを進めているが、このプロジェクトは、民博がこれから進んでいこうとしている方向性、博物館活動や研究活動のあり方を集約的に示している。このプロジェクトは、民博の所蔵する標本資料や映像音響資料の情報を、国内外の研究者や利用者ばかりで

なく、それらの資料をもともと作り使用していた社会の人びと、あるいはそれが写真ならその写真がもともと撮影された地域の人びと、すなわちソース・コミュニティの人びとと共有し、そこから得られた知見をデータベースに共同で付加し、新たな共同研究や、共同の展示、コミュニティ活動の実現につなげていこうというものである（本誌3頁の本館の研究覧を参照）。標本資料を里帰り展示のかたちで実際に現地にもっていって展示するという活動も、台湾などを対象に実施している。標本資料や、過去に現地で撮影された写真、動画を現地に持参し、新たな情報をつけてもらうこともあれば、現地の人びとを民博に招いて、情報をつけてもらうこともある。この活動は、人とモノ、人と人がそこで出会うことで発見があり、そこから新たな議論や挑戦が生まれていく、という「フォーラムとしてのミュージアム」の考え方を、博物館展示のあり方だけでなく、博物館の資料情報や研究情報の蓄積のあり方、さらには人類学の研究活動のあり方にも徹底させていくものといえるであろう。

冒頭でも述べたとおり、現在、社会のあらゆる場面で、人、モノ、情報の双方向の交流、接触、交錯が起こっている。1度始まった双方向化の流れは、2度と留めようがない。とすれば、それを積極的に活用する姿勢をもつことが、博物館の世界、学術の世界、いや社会そのものも含めて、あらゆる分野で求められているのだと思われる。

人類学も例外ではない。交流と越境が常態化した現代において、その状況を積極的に活用した知のあり方を求めるとすれば、それは、研究そのものを、研究者の間ばかりでなく、研究の対象に関わっている人びと、そして研究の成果の恩恵にあずかる人びとの間に積極的に開き、社会との協働作業のなかで研究を鍛え上げていくことであろう。先にあげた用語を用いれば、いわばそれは、研究そのものの「フォーラム化」、「フォーラムとしての学」の構築である。先に見たように、「存在論的転回」を果たした人類学が、他者の存在論を認める場の創造を求めていることには、この点で相同性が認められて興味深い。

学そのものがフォーラムを志向するのであれば、先端的な研究を進める一方で、文字どおりの人とモノ、人と人との物理的な接触と交流の場としての博物館を備えることは、いわば研究機関としての理想の形態である。民博は、その意味で、きわめて大きなポテンシャルを有しているといわなければならない。

しかも、今、上述のとおり、人類学と美術史学、博物館と美術館という区別を超えた協働の可能性が開けてきている。3年前、民博の創設40周年記念として民博と東京・六本木の国立新美術館との共同で開催した「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」は、国際的にみても、その先駆けとなるものであった。

いまさらいうまでもなく、フォーラムとしてのミュージアムも、フォーラムとしての人類学も、研究者とソース・コミュニティの人びとの参加だけで実現できるものではない。そこには、民博を利用していただく方々の積極的な参加が不可欠である。民博のポテンシャルをこれまで以上に引き出すためにも、読者の皆さまの、ご協力、ご支援をお願いしたい。

**【参考文献】**


Appadurai, Arjun 1986 *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.

Belting, Hans 2001 *Bild-Anthropologie: Entwürfe für eine Bildwissenschaft*. Paderborn: Wilhelm Fink Verlag.

Cameron, Duncan 1974 The Museum, a Temple or the Forum. *Journal of World History* 4(1): 189-202.

Chaney, David 1994 *The Cultural Turn: Scene Setting Essays on Contemporary Cultural History.* London: Routledge.

Gell, Alfred 1998 *Art and Agency: An Anthropological Theory*. Oxford: Oxford University Press.

Didi-Huberman, Georges 1990 *Devant l'image: Questions posées aux fins d'une histoire de l'art.* Paris: Minuit.

Henare, Amiria, Martin Holbraad and Sari Wastell 2007 *Thinking Through Things: Theorising Artefacts Ethnographically.* London: Routledge.

Latour, Bruno 1993 *We Have Never Been Modern*. Cambridge: Harvard University Press.

Strathern, Mariryn 1991 *Partial Connections*. Lanham: Rowman and Littlefield Publishers.

Viveiros de Castro, Eduardo 1998 *Cosmological Perspectivism in Amazonia and Elswhere*. London: HAU Books.



よしだ けんじ

国立民族学博物館長。博物館人類学専攻。主な著書に、『仮面の森――チェワ社会における仮面結社、邪術、憑霊』（講談社 1992年）、『文化の発見』（岩波書店 1999年）、『文化の肖像』（岩波書店 2013年）、『宗教の始原を求めて――南部アフリカ、聖霊教会の人びと』（岩波書店 2014年）など。